

# 特集 社会の無関心に立ち向かう時

ソーシャルワーカーは社会の無関心に対して何をすべきか。今回の特集とした。「あきらめモード」になっている時に改めて私たちの使命から捉えなおしてほしい。

## 3.11という視線の交差 —無関心に立ち向かう—

末 永 亜 衣  
青年部委員長／東北大学大学院情報科学博士後期



東北の寒い冬が去ろうとし、もうすぐ花が咲くかな、という時期に、

あの震災は起きた。震災当時、わたしは東京で生活していた。原子力発電所の事故によって、毎朝利用する地下鉄が間引き運転になり、夜には、まちの灯が消されたことを思い出す。あの震災では、都市と農村・漁村のつながりをそのようにして体感をした。このままここで働いていいのだろうか、という思いにわたしは駆られた。縁があり、わたしは2012年から宮城県石巻市に移住することになった。あれから10年が経過した。散文として、支援者としての内省と、都市と農村・漁村をつなぐ可能性を振り返ってみたいと思う。

『春をかさねて』という映画がある。石巻市大川小学校で妹を亡くされた、映像作家・佐藤そのみ氏による作品である。この作品には、「被災

者」の目から見た「支援者」が描かれていた。震災後のまちにボランティアにきた若者たちが、お揃いのピブスを着て、若者らしい身なりと、明るい声で車に乗り込む、というシーンがある。それを、主人公は街で見かける。一方は青春のページのようにはいやいだ様子が映し出される。しかし、他方の主人公は、津波で妹を亡くしており、彼らの様子を数メートル離れた場所から見ていたのだ。支援の「場所」が設定されて出会う。主人公とその同級生は、ボランティアに来ていた大学生に恋をするが、のちに、その大学生には東京に彼女がいることがわかり、彼がそこへ戻っていくことも暗示される。よくある恋愛というエピソードでさえも、「支援者」の世界からは、こちらへ渡ってこれるが、「被災者」の世界からは、渡れる橋がないという意味にも読み取れる。わたしは、彼ら彼女らにどう見られていたのだろうか。映画を通して学び、あの時の「被災者」の視線を感じ始める。

ここで、JIIアダムスとリッチモンドの相互の力動関係を言及する研究論文を思い起こしてみた（木原、1991）。木原によれば、当時、JIIアダムスの社会改良が隆盛し、それこそが社会福祉であるという社会背景において、リッチモンドの側は、COS運動が資本主義化の自由放任主義を背景とするものと皮肉られ、苦心している。JIIアダムスは、友愛訪問をするならば、援助者もまた訪問を受けなければならぬとし、援助者と被援助者の平等や、社会問題の公的責任性などの主張をしていたという。このことから、友愛訪問を主とするリッチモンドは、「ソーシャル」とは何か、ということとを深めてゆくのである。この研究が明らかにしているのは、ソーシャルワークの母としてリッチモンドを伝記化するのではなく、同世代の社会福祉を牽引した女性たちがいかなる相互の力動関係から、実践の理論化が行われたのかの過程であった。

この古典的な課題に学ぶことは大きい。確かに、ソーシャルワーカーは、支援者としての優位性に自覚的であるべきであろう。そのうえで、わたしたちは人々の間に、どのようなつながりの橋をかけることができるのだろうか。

福島での聞き取りから、原発避難者の多元的ストーリーについて言及した研究がある（佐々木、2018）。ここで描かれているのは、被災者の美しい日常が奪われた、というものではない。戦後の開拓地で、苦勞して開墾したこと、夫に灰皿を投げつけられたこと、姑に辛くあたられたこと……。そのインタビュウからは、困難な生活の延長線上に、「あの日」があった、ということが明らかにされてくるのだ。

戦後、産業化が進み、莫大な電力消費を求めて、都市と農村・漁村は発電施設を通してつながれることとなった。それにより、社会構造が変化し、そこにあつた問題は解決するのではないかという希望もあつたであろう。だが、「あの日」は、その希望も粉々にし、ますます都市と農村・漁村の構造が明白にされていった。

しかし、都市生活を送る人々はどこからやってきたのか。1970年ごろには、都市もまた問題を抱え、公害による健康被害などが発生した。高度経済成長とともに、若い人々はふるさとを離れ、都市で働き、疲弊していくふるさとの様子に、心を痛めてもいたであろう。あるいは、このような生活を子どもには送らせたくない、豊かな生活を送れるはずの都市へ、子どもを送り出した親たちもいたであろう。

ソーシャルワークは、母なるリッチモンドに従い、震災後も多くの困難を抱えた人々と向き合ってきた。しかし、ともすれば、それはリッチモンドが、社会改良が社会福祉であるという当時の社会背景において、「ソーシャル」・ケースワークとして体系化せざるを得なかつた課題に、今度は、現代のわたしたちが内省的に向き合うときかもしれない。





